

### ゴールボール

1 チーム 3 人の選手がアイシェード(目隠し)を着用し、視覚を完全に奪われた状態で中に鈴の入ったボールをゴールに向かって転がすように投げ、得点を競い合うスポーツ、それがゴールボールだ。この競技は、第二次世界大戦で視覚に障害を受けた傷痍軍人のリハビリプログラムとしてオーストリア、ドイツの医師によって考案され、後に競技種目へと発展していった。1976 年にトロントで開催されたパラリンピックから公式種目になっており、日本では、1992 年頃から本格的にゴールボールの普及、振興を目的とする活動が始まった。

しかし、この間に競技の知名度は上がったのかという質問に対して日本ゴールボール協会専務理事の近藤和夫氏は、「全然。」と苦笑いしながら即答する。「自分たちがやっているスポーツと障害を持っている人がやっているスポーツは別なのだという意識に問題がある。」と彼は語る。知名度が上がらない原因はそれだけではない。障害者スポーツは他の競技種目と比べ、派手さや迫力にやや欠けるため、人々が興味を持つ対象になりにくく、メディア等で取り上げられることも少ない。実際、ロンドンパラリンピックで女子日本代表が金メダルを獲得したことを知っている人はどれほどいるだろうか。

学生でありながら、ゴールボール男子日本代表の最年少プレーヤーとして活躍する川嶋悠太選手(21)。彼は網膜色素変性症が原因で 10 歳の時から目の見える範囲が狭まってしまった。元々は野球少年だったという川嶋選手は、障害を負ってからでも中学 3 年生まで野球に打ち込んだが、視力の低下や視野の狭窄ゆえに高校で続けるのが困難になった。野球に代わって熱中できるものを探していた川嶋選手は、盲学校の教員であったゴールボール日本代表コーチの誘いで、高校からこの競技を始めることになった。

川嶋選手は、競技を始めたばかりの頃、周りが全く見えない状態でプレーすることに恐怖心もあったという。しかし、周りの先輩、コーチやスタッフから指導を受けるなかで、徐々に暗闇への恐怖に慣れていったのだそうだ。プレーを始めて 5 年目の今では、空間認知能力が上がり、自分がコート上のどの辺りにいるのか正確に把握できる。「目が見えないから、物理的に出来ないこともあるかもしれないけれど、必ずしもすべてが出来ないわけではない。」川嶋選手は言う。「教えてもらえれば、できるようになることもある。」

確かに日本では、視覚に障害がある人は、怪我をする危険性が高いから、という理由でスポーツに取り組むのを拒まれてしまいがちである。しかし、視覚に障害がある人でも健常者が情報源になり、指導を受けることでサーフィンやクロスカントリーといったスポーツに取り組むことが可能なのだ。

ゴールボール競技では、選手が見えない分を補うコーチやスタッフからの指示を聞き、その指示を選手たちが正確に実行できるかがカギとなる。選手とスタッフが一丸となって戦いながら作戦が成功した時の喜びを一緒に分かち合えるのが醍醐味なのだ。パラリンピック出場経験がないゴールボール男子日本代表は現在、2016 年のリオデジャネイロパラリンピック出場を目標に練習に励んでいる。「障害者スポーツの認知度が上がって、オリンピックと同等の注目を浴び、見ている人を興奮させるようなスポーツになってほしい。」

### ③障がい者スポーツ

ライター：三浦元吾、Jonathan Wong

エディター：横澤樹

#### 編集後記

実のところ、私自身この記事を書くまでゴールボールについて全く知らなかったが、取材を通じてこの競技の面白みを知ることができた。この記事を通じて、人々が障がい者スポーツに興味を持つようになってくれれば幸いである。（三浦元吾）

日本に来て初めて取り組む記事だったが、不屈の闘志を持って障害者スポーツの発展に取り組む姿には本当に心打たれた。そして私も日本ゴールボールチームのファンの一人になった。記事を書く過程で英語の意味から日本語の意味に訳すときにニュアンスが変わってしまったり、英語で自分が言いたいことがうまく伝わらなかったりしたが、適切なアドバイスをくれた原賀さんのおかげもあって質の高い記事を作ることができた。本当に貴重な体験だった。（Jonathan Wong）